第 2 回原子力委員会
資料第5－2号

第1回原子力委員会定例会議議事録（案）

1、日　時　　1998年1月6日（火）15：15～15：35

2、場　所　　委員会会議室

3、出席者　　谷垣委員長、藤家委員、遠藤委員、依田委員、木元委員
（事務局等）加藤原子力局長、今村審議官
林政策課長、伊藤原子力調査室長
池本専門委員
原子力調査室　杉本、新井

4、議　題
（1）委員長代理の指名について

5、審議事項
（1）委員長代理の指名について
冒頭、谷垣委員長より伊原、田畑岡委員の退任及び1月1日付けをもって任命された、遠藤委員、木元委員の紹介がなされた後、原子力委員会及び原子力安全委員会設置法第4条第3項の規定に基づき、原子力委員会委員長代理に藤家委員が、さらに、藤家委員長代理の海外出張等による不在の際の委員長代理には遠藤委員が指名された。
続いて、委員より、
・原子力には光と陰の要素があり、これは巨大技術として避けがたいものであるが、光の部分が陰を圧倒することが必要である。そのためにも国民のご理解を得ながら進めていくことが大切であり、日本の原子力が世界に冠たるものであることをモットーとしてやっていきたい
・社会の様々な問題を考えるとき必ずエネルギー問題が絡んでくるが、これまでもそうした全体の中でエネルギーを捉え、また原子力を見てきた。原子力に対する風当たりは厳しいが、専門家との情報しをし、原子力委員会の姿が外からも見えるようにしていきたい。原子力のもつ凶器と利器の要素をよく比較考量していくことは大切であり、マスコミで言うところの社会部的センスあるいは非専門家の立場から、専門家とのパイプ役としてやっていきたい
・考え方によれば現在は原子力を見直す良い機会。平和利用に徹した原子力利用を世界に対して我が国が提言してしてきたことや、総合科学技術としての原子力の全体像を国民に示しながら理解してもらうことが大切。社会参加の下でものごとが決定がなされる時代であり、時間をかけても進めるべき必然的なものについて理解を得ることが重要
・現在、経済をはじめ社会全体に閉塞感があり先が見通せない。原子力についても同じであり、いま将来への展望を見せる必要がある。持ち越している問題はいろいろあるが、原子力の未来への展望を拓くよう国民の理解を得ながら一緒に努力したい
等の意見があり、谷垣委員長より
・原子力をどう進めるかは我が国の外交の重要な鍵の一つであり、また、原子力委員会と国民とのギャップを埋めることも非常に大切。この意味でも大変いい方に委員に就任いただいた
・科学技術庁長官の立場からは、動燃改革に関する法律について国会で存分の議論を行って全体像が国民に分かるものとしていきたい。同時に、動燃は核燃料サイクルの要であり、改革に魂を入れる年として原子力委員会の果の軽重が問われる年となるだろうからよろしくお願いしたい
との発言があった。